

ちょっとした行動で

浦安市立明海中学校 3年 岩永 陽翔

面白いと言えば不謹慎かもしれないが、最近、母親からなかなか興味深い話を聞いた。これは端的に言えば、祖父が危うく詐欺に引っかかりかけたという話である。

ある夜八時ごろ、母親に突然LINEが連投で送られてきた。LINEは母の妹つまり僕の叔母にあたり、僕らはみっちゃんと呼んでいるからで、祖父が勝手に屋根瓦の修理業者と契約してしまったという内容だった。すぐに電話に切り替え聞くと、祖父の家に突然に修理業者を名乗る青年が訪問。それから屋根の写真を見せられつつ、「お宅の屋根が破損しているので修理いたしますよ。」と話をもちかけられた末、とっととその業者と契約を決めてしまったらしい。金額は最初七五万。高いというと五十万になったという。

それを聞いた母も怪しすぎると思ったそうだが、その晩は特に忙しい状況にあったこともあり、初めは話を聞くだけのつもりだったという。みっちゃんももはや諦めていたようで、そのLINEの内容は解決を求めるといふよりかは、それに対する猛烈な愚痴が中心であった。どうやら祖父は久々に人と話すのが楽しくなってしまったらしい。話をしているうちに嬉々として契約を結び、それからみっちゃんの警告にも耳を貸さなくなってしまったらしい。

話を聞いて母は迷ったという。もう契約したというのだからいいか…高い授業料と思うか…いや、動くべきか。一瞬迷った後、ひとまず電話一本かけるくらいはしようと思ったという。祖父の家に電話をかけると、契約書をLINEで送ってくれ、それをこちらで確認して、正式だったら工事をすればいいから、としたという。こうして発覚したことは、なんと正式な契約書というものの自体がそもそも渡されていなかったということだった。その業者は、契約書は工事を施工する当日に持ってくるのだと言ってきたらしい。しかも工

事は明日だという。

こうして詐欺業者であることがいよいよ確信に変わりつつある中、極め付けには父親がその業者の求人サイトを見つけた。そこには、数台のフェラーリの前に一人ずつサングラスの男たちが立っている写真と共に、平均年齢二十三歳！中卒大歓迎！十六歳で月収百万円稼いでます！という謳い文句が書いてあったそうだ。

一方、みっちゃんはメールでのクーリング・オフの準備に移っていた。申込日から数えるとその日がクーリング・オフ期限の前日であったことに気づいたため、夜十二時の日付が変わる前に大急ぎでネットで検索して文面を作成、母と話しつつ、そのメールを祖父の代理人として送信した。母がみっちゃんから電話を受け、ここまではわずか三時間だった。

翌朝、クーリング・オフをする旨を伝えたにも関わらず、業者はこのこと祖父の家にやってきた。だが祖父も、以上のやりとりを電話、LINEグループで見聞きしていたため事の重大さには十分に気付いていた頃であった。祖父は業者と対面し、なかなか悪戦苦闘しつつも、なんとか自分で追い返したそうだ。そして後日、改めて別の修理業者を呼んで見てもらおうと、屋根には殆ど問題はなく、ただまるで「壊れてますよ」と見せびらかすかのように、ワイヤーが一箇所、人為的に切られていたらしい。

今回、七十歳まで大きな会社でしっかり働いていた祖父でも、思っているよりもはるかに簡単に、あんな飛び込み営業で騙されてしまうんだ、ということは僕にとって衝撃だった。それと同時に、そういう犯罪から身の周りの人を救うためにアクションを起こすことは、難しいことではないんだ、と感じた。今回は、母の「電話一本くらいかけよう」父の「ちょっと検索」みっちゃんの「メール一本」で回避できた。どれも大きな手間ではない。しかし、止められた犯罪の金額やそのあとの祖父母のダメージは軽くない。

これはきっと今回のような件に限らず一般的な話だと僕は思った。

誰かが詐欺などの犯罪に巻き込まれかけている時、それに気づけた身近な人間ができる範囲でいい。一步踏み出す、一言声をかける、一つ小さなアクションを取る…そういうことを意識することで、実は救えるケースが多いのではないだろうか。そうことを感じさせられた一件だった。